

〔報 告〕

## 山のジオパークにむけて

－摩尼山を中核とする景勝地トライアングルの構想－

### Toward the Geopark of the Mountains

－Strategy of the Scenic Spots Triangle around Mt. Mani－

中島 俊博・浅川 滋男

NAKASHIMA Toshihiro, ASAKAWA Shigeo

要旨：2010年の発掘調査以来、摩尼寺「奥の院」遺跡の考古学的研究を続け、2011年度末に報告書を刊行した。この成果をうけて、2012年度は摩尼寺「奥の院」遺跡の環境整備に取り組んだ。「奥の院」巨巖の前に繁茂する複数の広葉樹を伐採し、遺跡の平場と巨巖を一体化することを目的として活動した。現在、奥の院では岩窟・岩陰仏堂を伴う巨巖の全体を平場から視野におさめることができる。さらに、伐採された広葉樹のリサイクルとして、①シイタケの原木栽培、②ツリーハウス風竹編棚の制作、③登山路サインボードの制作・設置にも取り組んだ。こうして整備された摩尼寺「奥の院」遺跡であるが、周辺自然遺産・文化遺産との連携が十分でない。本稿では、摩尼山が山陰海岸ジオパークに含まれる点に着目して「山のジオパーク」と命名し、近接する景勝地との連携を模索した。鳥取砂丘・久松山（鳥取城跡）・坂谷神社で構成される「景勝地トライアングル」の中心に摩尼山は位置している。ここに3本のミニトレイルを設定し、その中継点としての摩尼山と門前の再活性化の構想を提示する。

【キーワード】 巨巖、ジオパーク、リサイクル、景勝地、トレイル

**Abstract** : After the excavation in 2010 we continued the archeological study on the innermost sanctum ruins of Mani-temple, and published a report at the end of fiscal 2011. In a continuation of this we worked on the environmental maintenance of the innermost sanctum ruins during fiscal 2012. We felled some broadleaf trees growing thickly in front of the huge rocks with the goal of unifying the flat ground of the ruins and the huge rocks. Now the entire panorama can be seen from the flat ground in the innermost sanctum. Furthermore, we strove to recycle the felled trees and bamboos by, for example, using trees as a raw material for shiitake cultivation, creating treehouse-like bamboo shelves, and the production and setting of signboards for a mountain hiking trail. While the innermost sanctum ruins were well-maintained through these activities, the coordination and cooperation with neighboring cultural and natural heritage is insufficient. Noting that Mt. Mani is included in the San-in Coastal Geopark, in this paper we have christened Mt. Mani the “Geopark of Mountain” and looked for a solution through cooperation with three adjacent scenic areas. Mt. Mani is situated at the center of a scenic triangle comprised of the Tottori Sand Dunes, Mt. Kyusho (Tottori Castle ruins), and Sakatani Shrine. We propose that three mini-trails should be established within this triangle, with a trail station revitalizing both Mt. Mani and the row of shops in front of the temple gate.

【Keywords】 Huge rocks, Geopark, Recycle, Scenery spots, Trail

1. 摩尼山と摩尼寺「奥の院」遺跡

1-1 摩尼寺縁起

摩尼山は砂丘に近い鳥取市覚寺集落から東へ4km余り上流に位置する霊山（標高357m）で、中国三十三観音霊場の一つである。別名を喜見山ともいう。喜見山摩尼寺は帝釈天を本尊とする古刹であり、鳥取県内では大山寺、三仏寺と並ぶ天台宗の拠点として崇拝されている（図1）。

天和3年（1683）に権大僧都法印覚深の著した『因幡喜見山摩尼寺縁起』（摩尼寺所蔵、以下「縁起書」という）によれば、承和年間（834～848）に比叡山第三代座主、円仁（794～864）によって創建され、その造営を藤原秀衡（1122～1187）が指揮したというが、9世紀の高僧と12世紀の武将が複合した開山伝承について疑問を覚えない人はいないだろう。ただ、摩尼山は極楽往生の末法思想と結びつき、平安時代後期ころから因幡国山中他界信仰の霊山となって、国内の死者の霊魂は摩尼山を経由して極楽に行く信じられていた〔竹内編1982〕。以後、中世に繁栄を遂げるが、その終末期に大きな打撃を受ける。天正9年（1581）、羽柴秀

吉が鳥取城渴殺に伴い摩尼山をも焼討ちした際、抵抗する摩尼寺の僧、道好の奮闘と憤死を縁起書は活写している。焼き討ちで荒廃した境内は、元和3年（1617）に池田光政が再興したと記す。『因幡誌』（1795）によれば、「按るに秀吉公這回寺を焼拂ひ玉ひしは今の摩尼寺にはあらず其地三四町東に離れて今の奥の院の谷にありしを焼打せられたるにて後に今の境内再興したるなり」とみえる。

ところが、『因幡民談記』（1688）所載の絵図には、山頂に近い摩尼寺「奥の院」のあたりに2棟の重層建物が描かれており、境内の移設は光政期より遅れる可能性が高い（図2）。下って、『因幡誌』（1795）や『稲葉佳景無駄安留記 影印篇』上巻（1858）の挿図には「奥の院」に堂宇は見受けられず、山麓に移設された現境内が描かれている（図3）。縁起書を著した覚深の後書には、「天正の兵革によって摩尼寺の縁起が失われ、そこで古老の伝えるところを聞いてこれを記した」とある。ところが、縁起書には元禄や享保の事柄まで書き足してあり、後世の写しとみなさざるを得ないであろう。このように、縁起書の記載そのものに不可解な部分が少なくなく、全体



図1 摩尼寺本堂



図2 『因幡民談記』にみる喜見山摩尼寺図（奥の院一帯）



図3 『稲葉佳景 無駄安留記』（1858）にみる現在の境内



図4 南東からみた摩尼寺「奥の院」遺跡Ⅱ区平場（2010）

的に信頼性が高い史料とは思われない。

### 1-2 摩尼寺「奥の院」遺跡

摩尼寺「奥の院」遺跡は、山頂の立岩から60mほど下ったところにある。そこには石塔を納める上層の小さな岩窟と、石仏・木彫仏を納める下層の大きな岩陰の仏堂が2層になって巨巖に穿たれ、その正面の平場（加工段）の地表面に多くの礎石が顔を出している（図4）。『因幡誌』（1795）や『稲葉佳景 無駄安留記 影印篇 上巻』（1858）に記された洞穴や岩陰がこれにあたる。周辺の風景や史料にみる位置関係からして、『因幡民談記』（1688）に描かれた2棟の重層建物は、この「奥の院」にあったものと思われる。

2010年、「奥の院」の4ヶ所に計200m<sup>2</sup>のトレンチを設け、約4ヶ月かけて発掘調査した〔浅川編2011・2012、ASAKAWA et al. 2012〕。下層で平安時代後半の柱穴、上層で室町時代後期～江戸時代初期の大型仏堂跡（8間以上×8間以上）を検出した。出土土器の年代からみて、行場としての出発は奈良時代に遡る可能性があるものの、下層平場と建造物の出現は10世紀以降に下るのは確実である。円仁の時代よりも新しい時代の創建ではあるが、三徳山三仏寺投入堂の建築年代（西暦1100年前後）よりも古い点には注意すべきであろう。

発掘調査の翌年（2011）、摩尼寺「奥の院」遺跡で出土した遺物の自然科学分析に取り組んだ。オーガーボーリング調査によれば、赤褐色の下層整地土は地表面下約2.5mに及んでおり、大量の凝灰岩粉を含むので、凝灰岩盤の削平や岩窟の掘削と下層平場の整地は同時に進化したものと推定される。ちなみにI区の最下層（整地層）で出土した炭化物のAMS炭素14年代は信頼性95.4%で西暦989～1030年を示しており、下層出土土器の年代観とよく一致している。一方、上層については、整地土最下層から15～16世紀の備前焼や青磁香炉などが出土しており、その層で出土した炭化物の放射性炭素年代との一致をみた。すでに述べたように、天正9年（1581）の羽柴秀吉による「鳥取城渴殺」に伴う一山焼き討ちが縁起書に記載されているが、上層遺構を覆うほどの炭層の堆積は認められなかった。秀吉の焼き討ちを裏付けるだけの積極的な考古学的証拠は未だ得られていない。

現状では、秀吉の焼き討ち以前に建立された上層堂宇が18世紀前半まで存続し、山麓に移設されたと考えられるべきであろう。ただし、下層堂宇が秀吉の焼き討ちによって焼亡した後、池田光政が「奥の院」で上層の堂宇を再興し、その後、東照宮の別当寺淳光院（大雲院）の末寺を経て、享保3年（1718）天台律院となり、比叡山安楽



図5 焼火神社より移築されたと伝わる仁王門（県指定保護文化財）上：摩尼寺仁王門正面 下：頭貫絵様拓本

院末寺として輪住が派遣されるのを契機に山麓に伽藍を移設したと推定することも不可能ではない。

### 1-3 摩尼山をめぐる文化・環境保護の動向

#### (1) 指定建造物と登録文化財にむけての動き

摩尼寺の仁王門は三間一戸形式の楼門で〔奈良文化財研究所1987：p. 50〕、文禄3年（1594）に鳥根県隠岐郡西ノ島町の焼火神社（旧焼火山雲上寺）より移築と寺伝に言い、鳥取県保護文化財に指定されている（2005年11月29日）。しかし、虹梁絵様の様式は18世紀後半を示しており、移築年代は明治の廃仏毀釈期に下る可能性もあるだろう〔浅川2000〕。屋根は入母屋造で、軒は二軒扇垂木であり、柱上に台輪や詰組を配するなど禅宗様の影響が濃厚に認められる。初重の両脇間は折上格天井で前後二室に分け、両脇間前方に仁王像を安置する。柱上の組物は出三斗、その上に桁を二段重ねる。持ち送りも2段として詰組状に配し、上層の腰組を支え、迫力のある外観を構成する（図5）。二重は桁行が偶数間（4間）で、全国的にも例が少ない。

内部は外部と対照的に装飾的な彫刻はなく、朱の彩色を残す以外は至って簡素である。二重内部は両側面と背面に寄せて二段の仏壇を造りつけ、下段に十六羅漢像、上層背面中央に釈迦如来像を安置する。

摩尼寺の建造物で保護の対象となっているのは「仁王門」だけであるが、2013年度より鳥取環境大学が国の登録有形文化財にむけて本堂・山門・鐘楼等の調査を進め

ており、すでに文化庁への申請を終えている。

(2) 山陰海岸ジオパークと摩尼山

山陰海岸ジオパークは、平成20年（2008）12月、日本ジオパーク委員会から「日本ジオパーク」として認定を受け、平成22年10月4日（現地時間10月3日）、ギリシャ・レスヴォス島で開催された会議で「世界ジオパークネットワーク」への加盟が認定された。このエリアの地形・地質学的特徴は以下のとおりである〔世界のジオパーク編集委員会・日本ジオパークネットワーク2010、神戸新聞但馬総局2010、参照 Web サイト1〕。

- 1) 日本海形成に関わる多様な火成岩・堆積岩層の分布とそれらの岩石海岸での露出
- 2) 日本海沿岸の多様な海岸地形
- 3) 日本海形成後も引き続く火成活動による火山噴出物・火山地形
- 4) 第四紀における地磁気逆転期の発見サイト（玄武洞玄武岩）
- 5) 火成活動の影響を受けた豊富な温泉資源
- 6) 日本海沿岸で生じる第四紀地殻変動を示す活断層・海岸段丘

2013年9月現在、世界ジオパークネットワーク加盟のジオパークは世界で29か国100地域ある。日本では、洞爺湖有珠山、糸魚川、山陰海岸、島原半島、室戸、隠岐の6ヶ所が世界ジオパークに加盟認定されている。ジオパークとは「大地の公園」を意味する。上に列挙した地

質や地形だけでなく、そこに暮らす人びとの生活や文化とも関連する大地の営みをひとつの遺産として学び、楽しむのがジオパークである〔平野2008〕。

山陰海岸ジオパークは、京都府（京丹後市）、兵庫県（豊岡市・香美町・新温泉町）、鳥取県（岩美町・鳥取市）の1府2県6市町村にまたがる広大なエリアを対象としている（図6）。摩尼山もまた山陰海岸ジオパークエリアに含まれている。当然のことながら、地質学的な価値のある山嶺の一つであり、鳥取砂丘にも近いことから、ジオパークの一部としてアピールすべきと思われるが、現状では、近隣住民ですら摩尼山をジオパークとして意識していない。

(3) 調査研究活動の概要

上に述べたように、摩尼寺「奥の院」遺跡は2010年度に発掘調査、翌2011年度に環境考古学的分析をおこない、その一連の成果を報告書としてまとめている〔浅川編2012〕。この成果をうけて、2012年度は遺跡の環境整備に取り組んだ。ここにその成果を報告する。この取り組みを推進する母胎となったのは、鳥取環境大学1・2年のプロジェクト研究1&3「修験道トレッキングー山と巨巖の信仰を訪ねて」（前期）と同2&4「ツリーハウスに挑戦！ー続・修験道トレッキング」（後期）である。

摩尼寺「奥の院」遺跡での活動を拠点としながら、同時に摩尼山を中核とする「景勝地トライアングル」を構



図6 山陰海岸ジオパークエリア内の摩尼山位置（web 参照サイト1より一部改変・転記）



図7 摩尼寺「奥の院」遺跡 樹林におおわれた巨巖(2012年5月)



図8 樹木番付位置

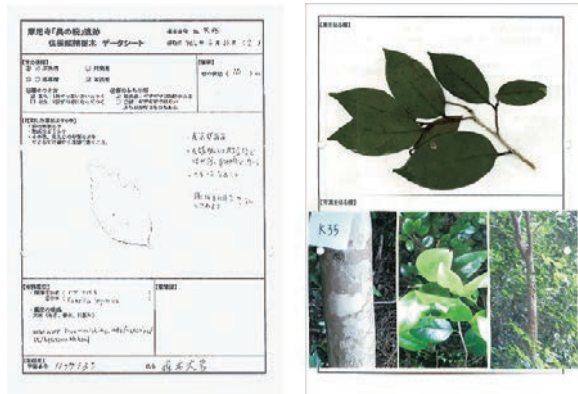


図9 樹種鑑定データ(表裏)

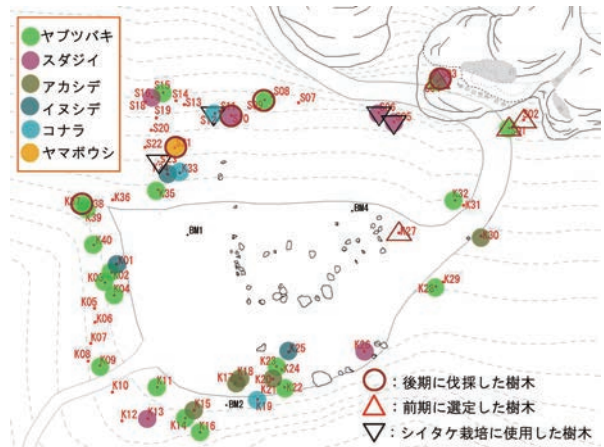


図10 樹種位置と樹種

想した。山陰海岸国立公園(とくに鳥取砂丘エリア)、立岩山坂谷神社(叢林が県指定保護文化財)、国史跡「鳥取城・太閤平跡」(久松山・樗谿)が形成するトライアングルの中心に摩尼山は位置する。本稿の後半では、そのエリアの保全活用について検討を加えている。

## 2. 摩尼寺「奥の院」遺跡の環境整備

### 2-1 巨巖現わる

#### (1) 平場・巨巖周辺の樹木調査

摩尼寺「奥の院」遺跡のシンボルは、岩窟や岩陰の穿たれた巨巖である(図7)。その巨巖の前には、大小さまざまな樹木が立ち並んで、平場から望む巨巖の視界を遮っていた。このため、巨巖を露わにするため樹木を伐採する必要があると考えたが、なりふりかまわず伐採を進めるわけにもいかない。森林の生態系を考慮しながら、樹木を間引くように伐採すべきと当初から考えていた。ついでに、巨巖・平場周辺の樹木の配置と樹種をあきらかにする必要がある。伐採候補となる樹木をできるだけ

多く選別し番付した上で、トータルステーションによる測量を実施した。樹木の番付(図8)は、加工段(平場)のイニシャルをK、斜面のイニシャルをS、巨巖の岩窟・岩陰周辺のイニシャルをGとし、その後ろに数字をつける。Kは40本(K01~K40)、Sは23本(S01~S23)、Gは25本(G01~G25)を数えた。2010年の発掘調査で用いたベンチマーク(国土座標系の[X, Y] = [-52222.00, -5614.42])にトータルステーションを設置し、各樹木までの距離と角度を計測して、その位置データをCADで図化し配置図を作成した。

また、伐採候補の樹木すべての葉と樹皮を採取し、写真を添付したデータシートを作成した(図9)。伐採の候補となる樹木選定の基準は、もちろん巨巖(岩窟・岩陰)の視界確保を第一義としたが、伐採木の再利用としてキノコの原木栽培を当初から想定していたので、キノコ栽培のホダギにリサイクル可能であるかどうかも指標の一つとなった。

樹種鑑定の結果、最も多かったのはヤブツバキである。

次いでスダジイ、アカシデ、イヌシデ、コナラが多く、ヤブツバキ以外はキノコ栽培の原木として利用可能である。ほかには、ヒメサザンカ、オヒヨウ、アオダモ、シロダモ、ヤマザクラなども含まれる（図10）。

2012年度前期に伐採樹木として選定したのはK27・S01・S02・S04・S05・S06・S12・S23の8本である。このうちスダジイ3本（S05・S06・S23）、コナラ1本（S12）をシイタケ栽培のホダギに利用した。後期は巨巖正面のスダジイ（S03）・イヌシデ（K37）・ヤマボウシ（S21）、石段正面のヤブツバキ（S09）を伐採し、シイ（S03）とイヌシデ（K37）を原木に転用した。

(2) 聖なる巖—環境整備活動による景観の変化

上に示した樹木のうち直径30cm未満の材は学生が自ら伐採した。最初に伐採したのはコナラ（S12）、スダジイ（S23）、ヤブツバキ（K27・K14）の4本である。この4本を伐り倒すだけでも視界はある程度良好になったが、巨巖正面のスダジイ2本（S05・S06）は直径50cmをこえる太径木であり、造園業者に委託して伐採した。S05・S06はいずれも樹齢60年前後の鋸葉のスダジイで、樹高は20mを超える。

2012年6月16日（土）、2本のスダジイをチェーンソーで伐り倒したときの感動を今でも忘れることができない（図11）。地響きをたてながら樹幹が倒れ落ちて梢は地面にくい込み、同時に今まで緑葉の仮面に覆われていた巨巖が眼前にあらわれた。神々しい姿だった。その日の仕事は多忙を極めた。大木の枝を切り落とし、長さ約90cm（3尺）の間隔に切断してラベルを打ち付ける。ラベルには樹木の番号と伐採日時を油性マジックで書いておく。長さ90cmにしたのは持ち運びが楽であるのと、シイタケ栽培の原木として適切な長さだからだ。200枚

以上のラベルを書き、裁断した丸太に貼り付けていった。

樹幹はチェーンソーで長さ約50cmに裁断したが、非常に重い。シイタケ栽培には大きすぎて不向きであり、再利用にも頭を悩ました。6月21日（木）には、学生が岩窟前の2本のヤブツバキ（S01・S04）を伐採した。この2本が消えたことで、弘法大師厨子を納める高い位置の岩窟と虚空菩薩立像の鎮座する中段の仏龕も平場から鮮明に見えるようになり、巨巖全体の神々しさが増した（図12）。以上、前期には合計8本の樹木を伐採した。間引き伐採の結果、樹木に覆われていた巨巖の全貌が露わになり、巨巖と平場と周辺の植生が一体化した。その姿は世界遺産条約にいうところの「化石化した景観」そのものだった（後述）。

後期の主眼は巨巖よりも、むしろその西隣で発見された石段の遺構を可視化することであった。下側の岩陰仏堂と上側の岩窟仏堂を繋ぐ石段は土やシダ類に覆われ、さらに周辺の灌木により識別し難いものになっていた。まず石段正面のヤブツバキ（S09）を伐採した。これに



図11 スダジイ S05・S06の伐採（2012年6月）



図12 摩尼寺「奥の院」遺跡 露わになった巨巖（2012年6月）



図13 清掃後の石段（2012年11月）



図14 巨巖周辺の全景（2012年11年）

より石段の位置を認識できるようになったが、石段上を歩き登るのは難しい状況であった。そこで、段上に堆積した土を少しずつ払いのけ、人が歩いて上れるようにすることを目的に清掃活動をおこなった。しかし、石段には土だけでなく、樹根がタコ足のように貼りついており、作業は難航した。樹根を引き剥がすと、石段の面が現れたのだが、踏み面は摩耗しつくしており、すでに段状遺構はほとんど存在しなかった（図13）。ただし、巨巖と石段の間に小さな溝を検出した。雨仕舞いの仕事であろうと思う（図14）。

### (3) 伐採木のリサイクルーシイタケ原木栽培

摩尼山麓門前の茶屋経営者がシイタケの原木栽培をしている。遺跡整備のために伐採した木材をキノコ栽培のホダギに再利用しようという発想は、そこから生まれたものである。2012年度前期は門脇茶屋喫茶部ご夫妻の指導の下、伐採樹木によるシイタケの原木栽培を進めていった。梅雨入りする前、シイタケ菌を植える樹木のサンプルを採取し、大学にもって帰った。その樹種は全葉

のスダジイ（S12）とコナラ（S23）である。伐採した2種類の樹木を長さ90cmに裁断し、大学の駐輪場に仮置きして乾燥させた。伐採木をホダギとする場合、通常3週間以上の乾燥期間が必要であるという。ご夫妻によると、シイタケなどの照葉樹でシイタケが収穫できるのは数年、広葉樹のコナラの場合は10年前後実り続けるという。シイタケ原木栽培の手順は以下のとおりある。

- 1) 電動ドリルで原木に穴をあける
- 2) あけた穴に金槌で種駒を打ち込む
- 3) ホダギを横積み伐採した樹木の枝葉で覆う。

大学駐車場に仮置きしたサンプルは乾燥状態のままとして、迫り来る梅雨の恐怖から、「奥の院」遺跡での種駒植え付けを先行させることにした。ホダギとしたのは巨巖正面の鋸葉スダジイ（S05・S06）である。門脇茶屋喫茶部の奥様から現場で指導を受け、合計119本の原木に穴をあけた（図15）。植えつけた種駒はネット通販で購入した直径9.2mmのものである。長さ90cmの原木に20cm間隔で穴をあける。原木の太さにもよるが、1本の原木に30～40の種駒を植え付ける。合計で1,300駒

の種駒を打ち込んだ。ホダギは地面に直接置くと腐ってしまうため、まず枝葉を厚めに敷く。これには伐採したヤブツバキの枝葉を使った。ツバキはキノコ栽培に不向きだが、こうした下地や覆い材、あるいは建築材としてリサイクル可能である。

分厚い枝葉マットの上にホダギを積み上げ、その上から全体をヤブツバキの枝葉で覆う。ここで種駒がなくなり、シイタケ栽培に最適なコナラのホダギが数本残ってしまった。これを大学に持ち帰り、駐車場で乾燥させていた原木とともに、学内で種駒を植えた。この種駒は日本きのこセンター菌茸研究所から提供していただいたもので、通販の駒よりもやや小さい（直径8.0mm）。種を植えたホダギは大学裏山に黒いネットを被せて保管した。菌茸研究所のご指導によると、本来のホダギ伐採と菌植え付け時期は秋であるという。そこで後期の班もシイタケ原木栽培の作業を継続することになった。

後期は原木栽培のサンプルとして持ち帰ったスダジイ8本にシイタケ、イヌシデ4本にナメコの種駒を打ち込

んだ。イヌシデはナメコの栽培に適している。後期は雨天の日が多く、「奥の院」遺跡から15本のホダギを持ち帰り学内で植え付けした。前期に余った8ミリの種駒300個と新たに購入したシイタケの種駒400個、ナメコの種駒50個を29本の原木に打ち込んだ。

その後、2013年4月にホダギの本伏せをおこない（図16）、同年11月には前期に種駒を植え付けたスダジイ（S05・S06）の原木から100枚以上のシイタケを収穫した（図17）。通常春に笠をひろげるシイタケが秋に採れたことについて、ご指導いただいた門脇茶屋のみなさんも驚いていた。ちなみに、大学の裏山のホダギでも秋にシイタケは実ったが、収穫量はわずかだった。2014年春の状況が気になるところである。

(4) 伐採木のリサイクル—ツリーハウスに挑戦！

摩尼寺「奥の院」遺跡には加工段（平場）が2段になって形成されており、その中間の斜面に竹が繁茂している。しかし、その竹林はいま枯竹の群落になってしまってい



図15 スダジイの穴あけ作業（シイタケ栽培 2012年6月）



図16 ホダ木を本伏せ（2013年4月）



図17 原木に実った大量のシイタケ（2013年11月）



図18 竹編み棚の全景（2012年7月）





図19 伐採木のストウール



図20 ツリーハウス風竹編み棚 (2012年12月)



図21 新旧サインボードが入り混り、距離表示が混乱している  
(中国自然歩道：太閤ヶ平～摩尼山)



図22 伐採木を再利用して作成・設置したサインボード

る。ここをシイタケ原木の仮置きスペースにしようとして枯竹を伐採したのだが、この枯竹も再利用したいと思い始め、前期にツリーハウス風の竹編み棚を試作した。「奥の院」遺跡に上がっても休憩スペースがなかったので、リュックサック、ペットボトル、弁当などを仮置きできる場所を確保したかったからである。制作場所は上の加工段の縁にたつ樹木群の下である。屋根はないけれど、梢の枝葉が棚を雨から守ってくれる。

枯竹の多くは傷みが激しく使えないものも少なくなかったが、再利用可能な枯竹を250cmの定尺にカットしていく。これを縦に4分割し、細長い板状の材に加工した。この割竹で2.5m四方の棚を作る。床下の大引・根太や床束には丸竹やヤブツバキの幹を使った。大引根太構法により、安定感のある床＝棚が完成した(図18)。割竹＝床板の接合には金具ではなくヒモを使用している。生木を傷めるのを防いだのである。

竹編み棚の横には、シイタケ栽培には向かないスダジイ

太径木の裁断材をストウールとして並べた(図19)。こうして、巨巖を眺めながら休憩できるスペースが遺跡上に確保された。ツリーハウス風の施設なので、山の景観によく馴染んでいる。

以上が2012年度前期の活動である。後期には本格的なツリーハウスの制作をめざしていたが、天候が災いして山に上られる時間が短かったため、前期に試作した竹編み棚に屋根をかけることにした。屋根は単純な切妻造と決め、原始的な「引っ掛け垂木」を用いて屋根の骨組を作った。その上に枝葉を被せ、さらに破風や千木状の屋根押さえを載せて葺き材を安定させた。引っ掛け垂木と枝葉の屋根葺き材は、ほとんど伐採したヤブツバキを切り分けて再利用した。これだけではもちろん雨が漏ってしまうが、先にも述べたように、屋根の上には複数の樹木(照葉樹)の枝葉が折り重なっており、床面が濡れることはほとんどない。

屋根が出来上がると、一気にツリーハウスらしくなる



図23 摩尼寺「奥の院」遺跡のルートマップ (表裏) ※A6サイズに折りたたむ

(図20)。屋根の下には摩尼寺「奥の院」遺跡のパネルを置いたが、一冬越した2013年春に上がってみると、パネルは吹き飛ばされて地面に落ちていた。

(5) 伐採木のリサイクルサインボードの制作と設置

鳥取県在住者でも摩尼寺「奥の院」遺跡を知らない人は少なくない。文化財を専門とする研究者や行政官にしても同じであり、遺跡に案内して巨巖を目の当たりにし驚愕する姿を何度も見てきている。

遺跡に至るには案内役が必要である。案内役がない場合、大半の訪問客はまず茶屋から石段を登って現摩尼寺の境内を参拝する。いったん境内に上がると「奥の院」までの道は険しい。境内から山頂の立岩まで登りきり、登山路とは反対側の道を下りていかなければならないからである。

「奥の院」に行くには、摩尼寺の参道である石段を登らずに茶屋を過ぎたところで右におれて山道を進むのが早い。こちらの山道は立岩に至る道ほど険しくはない。ただし、荒廃が進んでいる。危険な一本橋を渡ると、まもなく倒木による土砂崩れで荒れた山道が続き、歩行には注意を要する。

最大の問題はサインボードの混乱である。後に述べるように、これは久松山方面から摩尼山に至る中国自然歩道全体に共有される問題点である。サインボードの劣化や毀損、距離の誤表示 (図21) などのため、サインボードに従って登山路を歩いていても目的地に辿り着くことが難しいのである。「奥の院」遺跡はそういう場所にある。

この問題を解決するため、学生が自主的にサインボードを制作し、門前から遺跡を経て山頂に至る登山路の15ヶ所に設置した。なにより正確な距離を表示する必要がある。このためGPSなどを用いた曖昧な計測ではなく、巻尺を使った手計りで距離を測っていった。山道は曲がりくねりが多く、正確な距離計算には巻尺が最適だと判断したのである。測定の結果、門前石段端の midpoint から「奥の院」遺跡までは1,174m。「奥の院」遺跡から山頂まで292m、計1,466mであることが明らかになった。

このデータをもとに、門前から「奥の院」まで10枚、「奥の院」遺跡から立岩 (山頂) まで5枚のサインボードを設置した。2012年11月27日に巨巖正面のスタジア (SB03) を伐採した際、造園業者に依頼して裁断した

15枚の板材を道標として再利用した(図22)。

サインボード制作の前後に欧米人と山中で何度か出会ったこともあり、道標にはローマ字表記も加えた。ボードの上側に直径5mmの孔をあけ針金で道脇の樹木と繋いだが、それだけでは不安定なので、下側から枯竹でボードを支持した。サインボードとは別にルートマップ(図23)も作成しており、以前と比べればはるかに「奥の院」まで登りやすくなっただろう。

### 3. 摩尼山を中核とする景勝地トライアングルの構想

#### 3-1 山のジオパーク - 摩尼寺と坂谷神社

##### (1) ジオパークとしての摩尼山

以上みたように、摩尼寺「奥の院」遺跡での整備活動により、岩窟・岩陰仏堂をとまなう巨巖が露わになり、山頂の立岩とあわせて、凝灰岩の露出するエリアの範囲が鮮明になってきている。凝灰岩層の連続する「山のジオパーク」としての価値が顕在化してきたわけだが、その一方で、摩尼山の近隣にもすぐれた地質遺産・文化遺産が少なくない。本稿では、とくに鳥取砂丘(山陰海岸

国立公園)、立岩山坂谷神社(叢林が県指定天然記念物)、久松山(国史跡「鳥取城跡附太閤ヶ平」)をシリアルな資産群としてとらえている。砂丘と久松山はあまりにも有名なので、ここでは坂谷神社のみ解説する。

##### (2) 立岩山坂谷神社の巨巖と照葉樹林

立岩山は、岩美郡岩美町と鳥取市福部町の境にある標高394mの岩山である。『因幡志』の栗谷村の項に「村の後の高山を聳山或は武庫山ともいう」[竹内1982]とあるのは、当山のことをさしていると思われる。また同書には、坂谷権現(現坂谷神社)についての記述があり、武庫山に連なる山の中に磐座(いわくら)があり、そこに小祠(本殿)をなしたものとされている(図24)。たしかに、巨巖の岩陰に小さな本殿が鎮座している。絵様等の様式からみて、現本殿の建築年代は江戸時代後期であろう。本殿は深い岩陰のなかに鎮座している。想像するに、磐座たる巨巖の祭祀場所が岩陰であり、当初は建築化した施設はなかったはずで、後に神社本殿を配したのであろう。本殿の脇の岩肌には『因幡志』が「神代文



図24 坂谷神社の巨巖と本殿



図25 坂谷神社社叢(照葉樹林)

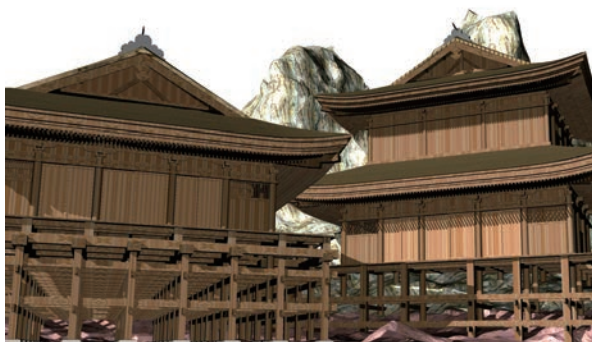


図26 摩尼寺「奥の院」遺跡 上層仏堂群の復元CG



図27 摩尼山を中核とする景勝地トライアングル



図28 本陣山から久松山を望む  
(標谿～摩尼山ミニトレイル)



図29 水遊びできそうな溪流  
(摩尼山～坂谷神社ミニトレイル)



図30 摩尼山の登山路から望む鳥取砂丘

字」と記す白い線刻が今も確認できる。

坂谷神社と摩尼山は指呼の関係にあるほど近く、神社の山号を「立岩山」、摩尼寺山頂の巨岩を「立岩」と呼ぶ。両山とも山頂もしくはその周辺に凝灰岩の巨巖が露出しており、古よりなんらかの関係をもった可能性がある。摩尼山の立岩は帝釈天降臨の場所として知られるが、もとは坂谷神社の巨巖と同じく、神霊の依代たる磐座であったのだろう。その後、坂谷神社は巨巖の自然崇拜から神道への道を歩み、摩尼山は仏教との接触によって山頂が帝釈天降臨の場に変容すると同時に、山全体が「仏界」に変貌を遂げたものと推定される。

坂谷神社は社叢が県の天然記念物に指定されている(図25)。スタジイ林を主体とする大規模な照葉樹林で、とくに参道石段の両側と本殿の鎮座する岩陰をくぐり抜けた一帯には、巨木のスタジイが群生している。プロジェクト研究に参加した環境大学の学生は、これを「モノケの森」と呼んだ。照葉樹林と巨巖の一体化した坂谷神社の環境は、神社成立以前の聖域たるヤシロの雰囲気をよく伝えている。

### (3) 「山のジオサイト」にむけて

すでに述べたように、摩尼山の立岩と坂谷神社の巨巖は山頂域に所在する自然の凝灰岩であり、文化史的にみても磐座として共通性を認めうる。しかし、摩尼寺「奥の院」遺跡の場合、これら自然の巨巖とは若干性格を異にしている。摩尼寺「奥の院」遺跡の巨巖はヒトが人為的に掘削した岩窟・岩陰仏堂であり、その正面を木造の掛屋が覆っていた可能性が高い(図26)。坂谷神社と摩尼山頂の巨巖に比べ、摩尼寺「奥の院」の巨巖は文化資産としての性格が非常に強くなっている。

一つ参考となる類例を掲げておこう。鳥取市青谷町八葉寺の子守神社は巨巖の岩陰に3棟の社殿が鎮座する(参照 Web サイト 2)。この巨巖は鳥取市の天然記念物に指定されている。常識的には自然の巨巖と岩陰が天

然記念物として評価されるわけだが、社殿群を安置するにあたって、岩陰の一部を人為的に加工・整形した可能性もある。この点、若干ながら摩尼寺「奥の院」遺跡との共通性をみいだせる。

このように、坂谷神社の巨巖(磐座)、摩尼山頂の立岩(帝釈天降臨)、摩尼寺「奥の院」の巨巖(岩窟・岩陰仏堂)は、この並び順に従って文化的性格を強く示している。山頂域に露出する巨大な凝灰岩としての共通する地質的特性を示しながら、経年にもなう信仰上の差異を映し出す一連の資産群として強調されるべきであろう。

世界ジオパーク・ネットワークに加盟登録された地質遺産は4年に一度、適性や活動度がユネスコによって再審査される。2014年は1度目のチェックの年にあたるが、海岸域にジオサイトが集中するなど、山側の地質や景観を軽視してきた点が批判の対象になりかねない状況にある。今後は内陸山間域にも注意を払い、海と山の資産の連携を図るべきだろう。その第一歩として、巨巖をシンボルとする「摩尼山頂・奥の院」と「坂谷神社巨巖」を砂丘と連携性のある「山のジオサイト」に認定してはどうだろうか。「山のジオパーク」としての側面を重視している点は世界ジオパークネットワーク(GGN)の審査に良い印象を与えるにちがいない[浅川他2012、浅川編2013]。

### (4) 化石化した景観

私たちが摩尼寺「奥の院」遺跡の調査研究にのり出したのは、「三徳山」を主題とする鳥取県の世界遺産申請が頓挫し、文化庁より「構成資産の見直し」を示唆されていたことに端を発する。三徳山だけでなく、山陰地方の密教系諸山の「奥の院」に焦点を絞り、一連の資産群の歴史をあきらかにするとともに、「山岳寺院と文化的景観」の特質を訴求しようとしていた[浅川編2011]。ここにいう文化的景観 cultural landscape は、1992年の

第16回世界遺産委員会（ユネスコ）で正式導入された概念である。文化的景観は、文化遺産のうち「人工の所産（自然と結合したものを含む）」に相当する。人間社会または人間の居住地が、自然環境による物理的制約のなかで、社会的、経済的、文化的な内外の力に継続的に影響されながら、どのような進化をたどってきたのかを例証するものである、とユネスコは定義している。いわば「自然と人間の共同作品」であり、以下の類型に分けられる。

- 1) 人間の設計意図の下に創造された景観で、庭園や公園など
- 2) 有機的に進化してきた景観
  - (i)化石化した景観 (ii)継続している景観
- 3) 自然的要素の強力な宗教的、芸術的又は文化的な関連性によって定義される景観

わたしたちが調査し整備活動を続けてきた摩尼寺「奥の院」遺跡は、上の類型のうち2-(i)の「化石化した景観」に該当する文化的景観である。しかし、日本の文化財保護法には「化石化した景観」を評価する条項が存在しない。

世界遺産条約の影響を受け、日本でも2004年の景観法施行に伴い、文化的景観の概念が文化財保護法に導入された。しかし、世界遺産条約と日本の文化財保護法では文化的景観の定義が少なからず異なる。日本の文化財保護法では、世界遺産条約の1と3は「名勝」、同2-(i)は「史跡」と概念が重なりあい、2-(ii)「継続している景観」のみが保護の対象外にあった。「継続している景観」の代表例は棚田である。文化財保護法における文化的景

観は農林水産業に傾斜しており、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」（2条1項第5号）と定義されている。このように、文化財保護法における文化的景観の対象は農林水産業の「生活と生業」にほぼ限定されている。世界遺産条約にあって文化財保護にない2-(ii)「継続している景観」を補うことが主目的であり、他の類型は名勝や史跡で保護できると考えたからである。

#### (5) 史跡名勝としての摩尼山

上の定義に従う限り、摩尼山は文化財保護法における文化的景観の対象外となり、その保護措置を受けることはできない。旧来の「名勝」「史跡」の枠組のなかで保護していくほかないであろう。ここでおさらいをしておく。

史跡とは「貝塚、古墳、都城跡、旧宅その他の遺跡で我が国にとって歴史上又は学術上価値の高いもののうち重要なもの」（文化財保護法第2条及び第109条）とされ、歴史上または学術上価値が高いと認められる場所のことをさす。名勝とは「庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地で我が国にとって芸術上又は鑑賞上価値の高いもの」（文化財保護法第2条及び第109条）で、芸術上または観賞上価値が高く、景観が優れている土地である。鳥取県では、三徳山が名勝と史跡の両方で国の指定を受けている。摩尼山は「名勝」、摩尼寺「奥の院」遺跡は「史跡」として三徳山に比肩しうるだけの価値を有するものであり、早急の保護措置が望まれる。



図31 山陰海岸ジオトレイル構想（Google マップを一部改変）

また近年、三徳山は大山隠岐国立公園への編入がほぼ確定しており、再びこれに倣うならば、砂丘に近く巨巖や原生林的植生を有する摩尼山と立岩山坂谷神社の山陰海岸国立公園編入を検討すべきであろう。とりわけ、摩尼山から望む山陰海岸の眺望は絶景であり、名勝としての価値は高く、さらに山陰海岸国立公園との一体化は急務であると考えられる。

### 3-2 景勝地トライアングル構想

#### (1) 摩尼山を中核とする景勝地トライアングル

すでに繰り返し述べてきたように、本稿では、鳥取砂丘（山陰海岸国立公園）、坂谷神社叢林（県指定天然記念物）、久松山・太閤ヶ平（国指定史跡）を結ぶ三角形のエリアを「景勝地トライアングル」と仮称している（図28）。摩尼山はその三角形の中心に位置している。これらはすべて山陰海岸ジオパークのエリアに含まれており、連携性の高いトレッキングゾーンとして再生するアイデアを以下に示そう。高齢化の進む現代社会にあって、トレッキングやスロージョギングなどのスローライフ的運動が中高年層にひろく普及し、その影響は若者たちにも及んでいる。上に定義した景勝地トライアングルは、すでに整備されている中国自然遊歩道を包含しており、早期の実現が可能な構想である。

#### (2) 3つのミニトレイル

摩尼山を中核とする景勝地トライアングルには、次の3つのミニトレイルを設ける。トレイルとは、山脈や街道を徒歩だけで歩き通すトレッキング路のことである。久松山・梶谿～摩尼山ミニトレイル（約5.5km）：梶谿～太閤ヶ平の舗装された散策路と久松山（鳥取城跡）の登山路は月に1万人以上の利用客がある。太閤ヶ平から摩尼山に至る中国自然歩道は野径の風情に味わいがあり、久松山や摩尼山を遠望できるビューポイントも少ない（図28）。その一方で、登山路・休憩舎の荒廃やサインボードの混乱が目につき、トレイルとしての老朽化が否めない。また、久松山・梶谿から約2時間半かけて摩尼山に至っても、門前から市街地に帰る公共交通手段がないことがこのトレイルの利用者減少の遠因になっている。

摩尼山～坂谷神社ミニトレイル（約3.8km）：摩尼山門前から「奥の院」を経由して坂谷神社に至るルート。一部をのぞいてほとんどが中国自然歩道になっている。摩尼山中は溪流の景色（図29）などが見事で、緩やかな下り道が多いので比較的歩きやすい。しかし、福部側の山腹にあたる箭溪（やだに）から中国自然歩道が県道43号

線と重複する。全体にサインボードが少なく、ルートは分かりにくい。県道とは異なる位置にトレイルを整備する必要があるだろう。

摩尼山～砂丘ミニトレイル（未整備）：摩尼寺境内から山頂に至る登山路には山陰海岸や湖山池を眺望できるビューポイントが少ない（図30）。一部には丸太を使ったベンチを置く休憩スペースを兼ねる眺望地点もあり、そのような溜まり場から砂丘に旋回しつつ下りていくミニトレイルを整備したい。このトレイルにより、砂丘と摩尼山の一体感が強まるだろう。また、摩尼山から砂丘に移動することで、公共交通手段との連携も可能になる。

#### (3) 山陰海岸ジオトレイル構想

上に仮称した景勝地トライアングルに類するエリアは山陰海岸ジオパーク内に数多く設定できる。そうしたエリアを地域ごとに経営して孤立させるのではなく、相互に連携させることで、ジオパークの全域を網羅するロングトレイルに拡大することが可能になる。ここでは、そのロングトレイルを「山陰海岸ジオトレイル」と仮称しよう。山陰海岸ジオパークのエリアでは、日本海側にジオサイトが集中し、山間部には多くのキャンプ場が存在する。また、扇ノ山から兵庫県の海岸部に抜ける山道は加藤文太郎の「単独行」ルートとしてもよく知られている[加藤1941]。それら海と山の景勝地やキャンプ場を連携すれば、総長約250kmに及ぶ壮大なロングトレイルコースが誕生するだろう（図31）。それはオーストラリアのグレートオーシャン・ウォークやネパールのアンナプルナ・サーキットなど世界七大トレイルに匹敵するロングトレイルであり、日本にとどまらず世界のバックパッカーを魅了する可能性を秘めている。

## 4. 摩尼寺門前活性化計画

### 4-1 摩尼寺門前の現状

#### (1) 参拝客の減少

摩尼寺に檀家はいない。檀家がいるとしたら、それは因幡国の民すべてである。冒頭でも述べたように、摩尼山は因幡国山中他界の霊山であり、因幡の民は摩尼山を経由して極楽に昇天すると信仰されてきたからである。ほんの20年ばかり前まで門前では縁日が賑わい、2軒の精進料理茶屋も繁盛していたが、信仰心の薄らいだ昨今、摩尼寺は参拝客を大きく減らしている。

参拝客の減少には、交通の不便さも影響している。鳥取市内、砂丘のいずれからも車で約20分の位置にあるにも拘わらず、摩尼寺門前と市街地・砂丘を結ぶ公共交通



図32 駐車場として使われている摩尼寺門前茶屋1階スペース

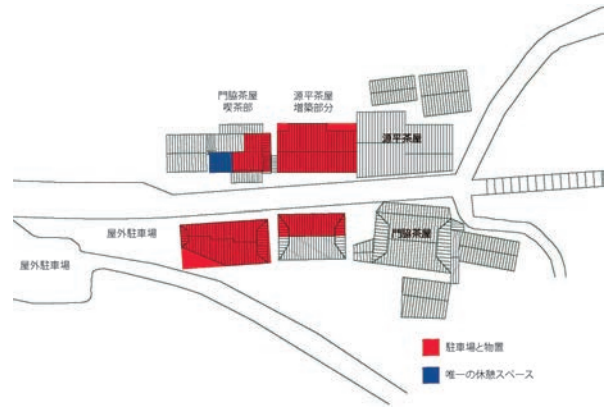


図33 摩尼寺門前屋根伏図（現状）

手段は存在しない。参拝者は基本的に自家用車で訪れるしかなく、久松山・太閤平方面からのトレッキング客に至っては門前から元の登山口に戻るには歩いて帰るしかない状況で、むしろ山道を福部町箭浜に抜けたほうが県道43号線でバスを拾いやすいのが現状である。

半公共の交通手段として、茶屋のマイクロバスがあるけれども、マイクロバスを利用できるのは茶屋の顧客に限られる。その茶屋自体、最盛期は過去のものとなっている。市街地からの交通が不便なことに加えて、精進料理の高級感が客足を鈍らせているのであろう。景勝地トライアングルが実現しミニトレイルが整備されても、交通の不便さを克服しないかぎり、中継点たる摩尼寺門前の活性化には結びつかない。

## (2) 門前の空間的課題

空間構成をみても、摩尼寺門前には人が滞留しにくい状況が生まれている。参拝客が門前で休憩できる場所は、いま門脇茶屋の喫茶部しかない。清流水を使った手淹れの珈琲に人気があり、昭和レトロ風の内装にも懐かしさを覚えるが、なにぶん席数が少なく（10席以下）、常連客以外の活用が多いとは言えない。他の建物はすべて源平・門脇両茶屋の2階建の施設だが、勘定口を除く1階はすべてマイクロバスの駐車場になっている（図32）。

飲料の自動販売機は門前に2ヶ所あり、登山客には必要不可欠の設備になっている。しかし、その一方で、訪問客が自由に利用できる屋外のトイレがない。どうしてもトイレを使いたい場合は、茶屋内部のトイレを拝借するしかない。

こうした施設の状況により、訪問客の動線は直線的になっている。屋外駐車場で車を停め、石段を登って本堂を参拝し、石段を下って屋外駐車場に戻り帰途につく。

繰り返しになるけれども、門前に人の滞留できるスペースはない（図33）。土産物を買ったり、飲食したりする頻度は著しく低いのが現状と言わざるをえないであろう。以下では、おもに建築計画的な視点から門前の再活性化について具体的な提案を示す。

## 4-2 門前施設計画と動線の改善

### (1) 門前施設計画

上にみたように、門前の建築群において動線が直線化し、人の滞留するスペースがなくなっている最大の要因は茶屋1階部分のほとんどを駐車場としているところにあるだろう。この1階駐車場部分を人が滞留する情報提供・各種販売・カフェ・飲食など多機能を有する「道の駅」的な施設に改装することで、動線に膨らみをもたせることが可能になるだろう。

このアイデアは、精進料理を提供する茶屋の存在を否定するものではない。精進料理は茶屋の2階を会場として今後も持続的に提供すればよいと思う。しかし、現実にはトレッキングする人々が山歩きの格好でお座敷料理を楽しむ気分にはなりにくいだろう。2階座敷での精進料理は堅持しつつ、1階については、他地域の門前茶屋のように、気軽に立ち寄って口のできる軽食を提供すべきではないだろうか。たとえば、味噌田楽の立ち食い、とち餅ぜんざい、蕎麦（ここでは「摩尼蕎麦」と仮称する）、精進弁当、甘酒などを1階のオープンスペースで販売するのである。これらは精進料理の切り売りといえるものであり、門前の活性化に大きく貢献するだろう。それらを販売したり、摩尼山・摩尼寺の情報を提供する施設として、ミニ・ミュージアム、多目的スペース、カフェ・店頭販売コーナー、名物料理店、屋外トイレを導入する（図34）。

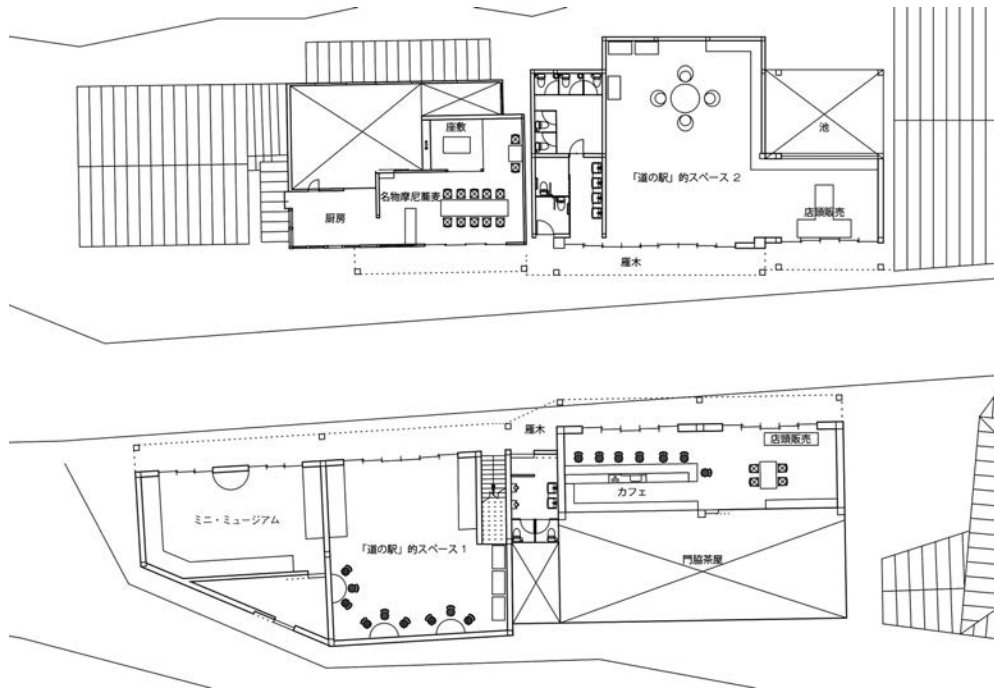
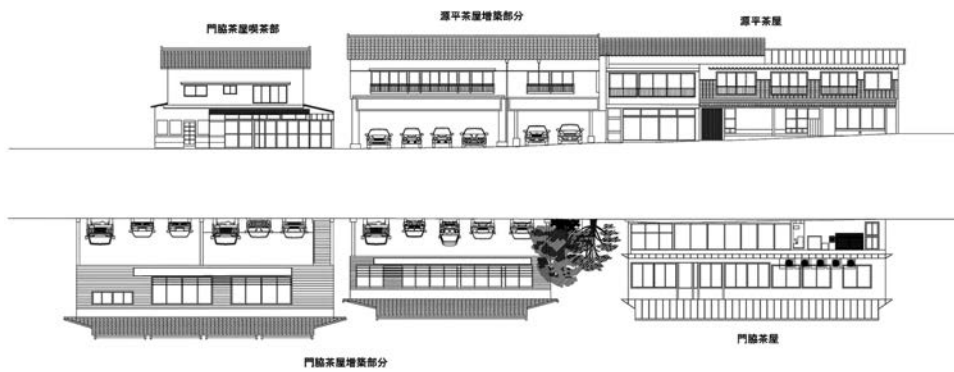
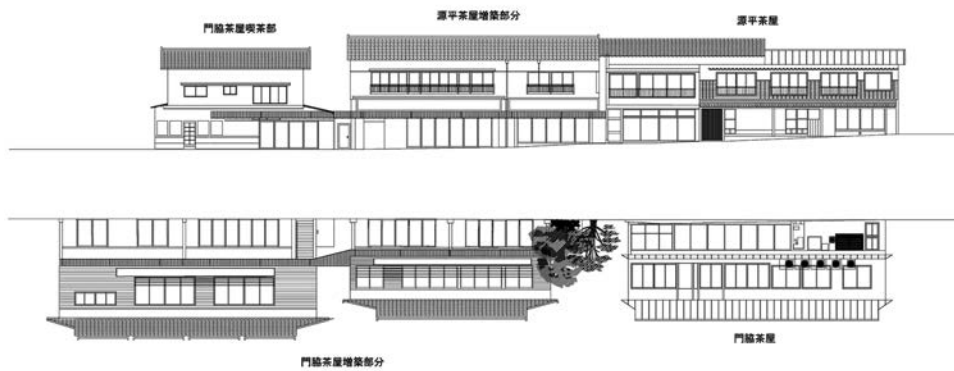


図34 門前活性化平面図



摩尼寺門前 現状連続立面図



摩尼寺門前 修景連続立面図

図35 摩尼寺門前連続立面 (上) 現状図 (下) 修景図



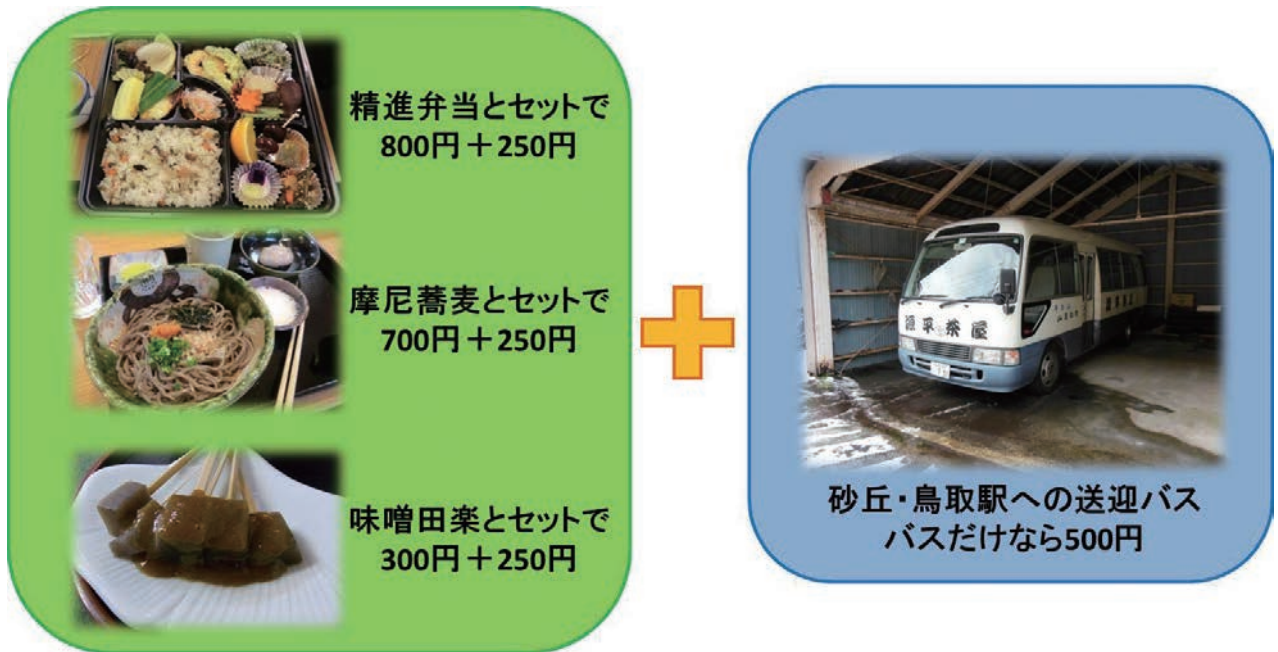


図36 商品と組み合わせたデマンドバス

ミニ・ミュージアム：訪問客がまず立ち寄る情報センター。門脇茶屋いちばん外側の1階駐車場を利用する。摩尼山の歴史を説明するパネル、「奥の院」で出土した土器などを展示する。パンフレットやルートマップも自由に手にとれるようにする。

多目的スペース1：門脇茶屋の駐車場を利用した「道の駅」的空間。自販機コーナーと休憩スペース、土産物売り場を設ける。中央部分はオープンにして、季節折々の使い方をする。野菜や椎茸などの即売場にもなる。

カフェ・店頭販売コーナー：門脇茶屋の駐車場を利用。現在ある喫茶部をここに移動する。面積をややひろくとり、席数を増やしたい。昭和レトロな雰囲気を残した方がよいだろう。カフェの隣に休憩スペースを設け、味噌田楽や甘酒・とち餅ぜんざいなどを店頭販売し、オープンスペースで食べられるようにする。精進料理弁当も販売する。登山客の弁当としてペットボトル茶とセットで売るのが理想的だろう。

摩尼蕎麦：現在の喫茶部と源平茶屋の駐車場を複合して蕎麦屋とする。そば殻の多い真っ黒な蕎麦にキノコ類をトッピングした精進蕎麦のレストラン。

多目的スペース2：自販機コーナー、休憩スペースなどは多目的スペース1とほぼ同じだが、多目的スペース2には登山客のための給水・給湯スペースを設ける。

屋外トイレ：給水・給湯スペースと壁を隔てた位置に屋外トイレを設置する。男子トイレ、女子トイレ、身障者用トイレすべてを含む。

雁木の設置：雁木とは豪雪地帯で用いられる雪よけの庇である。毎冬、豪雪に悩まされる摩尼寺門前には必要不可欠な装置であろう。これにより、一連の施設が庇で繋

がれるばかりか、外観はその庇によって和風の色彩が強くなり、門前町としての風情を獲得できるであろう（図35）。

## (2) デマンドバスの交通計画

以上の施設計画により、門前の動線にはふくらみができて滞留スペースが生まれ、外観は門前町らしくなる。これで門前空間の改善は進むであろうが、市街地等との交通の不便さという大きな問題は解決できない。

ここでは上記諸施設で販売・提供する物品と複合するデマンドバスを提案したい。デマンドバスとは、一般的な路線バスとは異なり、基本的に事前の電話予約により運行する個人要求型の乗り合いバスであり、通常は自治体が運営するが、摩尼寺門前の場合、茶屋の所有するマイクロバスを転用できる。

マイクロバスは1時間に1本を原則とするが、利用客が席数に達した場合、早めの出発も可能とする。仮に鳥取市街地までの運賃を500円として、土産物や飲食品を購入した場合、運賃を半額にするという特典をつける。たとえば、摩尼蕎麦700円、味噌田楽300円、精進弁当800円とした場合、それを購入した顧客の運賃は250円となるから、交通費込みならば、摩尼蕎麦+バス代950円、味噌田楽+バス代550円、精進弁当+バス代1,050円となる（図36）。こうした商品と組み合わせることで、マイクロバスの利用頻度を高めることができるだろう。この場合、バスの本数をあまり多くしない方がよいかもしれない。バスの待ち時間をやや長くすることで、顧客はカフェ、蕎麦屋、販売コーナーを利用するなどして時間をつぶすしなくなるからだ。そのためには、もちろん、

施設を充実させ、買い物・飲食を楽しんでいただけるだけの十分な工夫が必要であり、それが何にも代えがたい前提条件になる。

#### 5. おわりに

以上、摩尼寺「奥の院」遺跡の環境整備活動から出発して、前半では、自然資産・文化資産としての遺跡と山の価値を示しながら、その保護のあり方を提案した。すでに摩尼寺境内建造物の登録有形文化財申請を終えており、今後は摩尼山頂・奥の院の巨巖エリアを登録記念物にする活動へ移行する予定である。一方、後半では、摩尼山の周辺関連資産である鳥取砂丘－久松山・樗谿－坂谷神社によって構成される「景勝地トライアングル」をミニトレイルでつなぐ構想を提示した。景勝地トライアングルの中心に位置する摩尼寺門前ではあるけれども、交通の不便さなどから賑わいを失っており、おもに施設計画と交通計画から実現性の高い再活性化の展望を示した。今後は地域住民と足並みをそろえ、計画の具体化に尽力していきたいと思っている。

【附記】 本稿は平成24年度鳥取環境大学学内特別研究費「摩尼寺『奥の院』遺跡の文化資産保護と環境整備計画」(代表者・浅川)の成果として刊行した浅川編[2013]の続編であり、両者は対をなす研究成果である。

#### 参考文献

- 1) 浅川滋男 (2000) 『離島の建築』 至文堂
- 2) 浅川滋男編 (2011) 『大山・隠岐・三徳山－山岳信仰と文化的景観－』 鳥取環境大学建築・環境デザイン学科&鳥取県教育委員会文化財課歴史遺産室
- 3) 浅川滋男編 (2012) 『摩尼寺「奥の院」遺跡－発掘調査と復元研究－』 平成22～24年度科学研究費基盤研究(C) 報告書、鳥取環境大学
- 4) ASAKAWA Shigeo et al. (2012) “Innermost SanctumRuins of Mani-temple –Excavation and ReconstructionStudy–”, the 9th ISAIA(第9回アジアの建築交流国際シンポジウム): 6p

- 5) 浅川滋男・中島俊博・清水拓生・仲佐望 (2012) 「山のジオパークにむけて－摩尼山と摩尼寺『奥の院』遺跡－」 山陰海岸ジオパーク国際学術会議「湯村会議」ポスターセッション論文アブストラクト:p. 93
- 6) 浅川滋男編 (2013) 『聖なる巖－窟の建築化をめぐる比較研究－』 平成22～24年度科学研究費基盤研究(C)・鳥取環境大学学内特別研究費成果報告書、鳥取環境大学
- 7) 阿部恭庵 (1795) 『因幡志』(翻刻は幸田屋蔵『因幡志』世界聖典刊行協会、1981)
- 8) 加藤文太郎 (1941) 『単独行』 朋文堂
- 9) 小泉友賢 (1868) 『因幡(稲葉)民談記』(翻刻は徳永職男『稲葉民談記』上・下、日本海新聞社、1958)
- 10) 神戸新聞但馬総局 (2010) 『山陰海岸ジオパーク』 神戸新聞総合出版センター
- 11) 米逸處『稲葉佳景 無駄安留記』(翻刻は、鳥取地誌研究会『稲葉佳景 無駄安留記 影印篇』非売品、2006)
- 12) 世界のジオパーク編集委員会・日本ジオパークネットワーク (2010) 『世界のジオパーク』株式会社オーム社
- 13) 竹内理三 (1982) 『角川日本地名大辞典31 鳥取県』 角川書店
- 14) 平野勇 (2008) 『ジオパーク－地質遺産の活用・オンラインツアーリズムによる地域づくり－』 株式会社オーム社
- 15) 奈良文化財研究所 (1987) 『鳥取県の近世社寺建築』 鳥取県教育委員会

#### 参照 Web サイト

- 1) <http://sanin-geo.jp>
- 2) <http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-323.html>

※参考 URL は全て2013年10月15日現在

(受付日2013年10月15日 受理日2013年11月21日)